第19回 福岡アジア美術館 アーティスト・イン・レジデンスの成果展

ダイアローグ ―交信する身体

作家の言葉

山本 聖子

《白色の嘘、滲む赤》2023年

無機質だと思っていたモノが突然生々しい表情を見せた時、はっとさせられる時がある。私にとって、鉄はまさにそういうモノだった。学生時代に夢中になって溶断や溶接をしていたのは彫刻を作りたいというよりも、熱でにゅるりと溶けた断面や、かさぶたのようなサビの表面、飛び散る火花など、様々に変化する鉄の表情を見ていたかったからだと思う。また、使う器具は高温高圧の危険と隣り合わせで、作業中はまるでトランス状態にあり、そこから醒めたとき、鉄との激しい関わりのことは、幻のように覚えていなかった。そういった経験の全てが、赤く燃える身体のようにエロティックで私を魅了し、以来鉄を身体として捉えるようになった。
幼少時代から過ごした鉄筋コンクリートの白い団地は、便利で快適、そして何より合理的であった。しかし、そのよく管理された無機質で清潔な箱の連続は、人間の生き物としてのにおいや手触りを封じ込めるフレームのようで、ある種の不穏さをまとっていた。それは住人である私にも大きな影響を与え、身体感覚はもちろん思考すらも徐々に剥ぎ取られていったのである。

早急に産業近代化を進めたい明治政府は製鉄業に莫大な資本を費やし、1901年北九州に官営八幡製鉄所(現：日本製鉄株式会社九州製鉄所八幡地区)を操業させたが、以来そこはまるで世界情勢や時代の変化を映し出す鏡のように、常になんらかのエネルギーが渦巻き、その周辺にはいつも翻弄される人々の姿があった。
大きなエネルギーが意図的に起こされるとき、それはたいてい「平和」「安全」「発展」「清潔」などなど、耳障りのいい言葉とともにやってくるが、それらのほとんどがなぜか「白色」を纏っているように思う。そのイメージは人々を安心させ、あたかも団地の構造が赤い鉄筋を白いコンクリートで固めているように、その色に染まるよう促されてしまう。しかし「白」は、本来の語源を辿れば「素(しろ)」であるように、他の色に着色されていない素材のそのままの「状態」のことを指す。つまり白色という「色名」になった時点で、そこにはある種の嘘が含まれ、さらにその純粋性さゆえの排他的性格によって、誰もがそれに触れようとしなくなる。

明治政府が製鉄所を作るにあたり引用した『鉄は国家なり』というビスマルクの言葉を、「鉄」を「身体」に置き換えて読んでみてほしい。そこに浮かびあがるのは何だろうか。映像に登場する鉄のスティックは50.3cmで、それを1辺にして立方体を組むと1トンの鉄塊の大きさとなるが、これはかつて新日鉄の時代、合理化の名のもとに「四組三交替

制度」が実施された1970年に急激に増えた労働災害の数と関係している。当時一人一月当たりの粗鋼生産量が23トンに対し、毎月23名の人が亡くなっていたという記録があり、つまり1人の労働者がひと月1トンの鉄を生産しては死に絶えたという壮絶な状況を示している。(*)

また同じく映像中の男性の声によって朗読される詩「安全管理のために」「カーテンのない部屋」は、1966年に製鉄所の職場サークルが発行していた同人誌「詩炉」(**)から引用したが、いずれも白色の言葉で彩られた大きな力に巻き込まれ、ただただ歯車と化した身体の赤が見える。

今回、日本製鉄九州製鉄所の寛大なご協力のもと、鉄がまさに生まれる現場を撮影することができた。そこにはとんでもなく巨大な設備が、モンスターのように熱と炎を撒き散らし底無しのエネルギーを見た気がして震撼した。それはまさに身体の根源的なエネルギーのようだった。
幼少時代からの無感覚さや思考停止感は、どこからやってきたのかという自分自身への問いは、産業近代化の歴史と地続きであると考えている。私は何かしらによって白く塗り固められ、自分の合理的な生活が過去の誰かの苦しみの先にあったことすら気づかなかった。鉄サビは規格品となった鉄が、元の鉄鉱石の姿に戻ろうとして生じるものだというが、私も白く塗り固められた自分の身体から真っ赤なサビを呼び戻すように、これからの未来を考えていきたい。

山本 聖子

* 鎌田慧著「死に絶えた風景―日本資本主義の深層から」ダイヤモンド社から引用。
** 同人誌「詩炉」 発行者「詩炉」社 発行年 1966年

本作品は、2023年9月16日~9月24日の会期中、Artist Cafe Fukuoka(中央区城内2-5)に展示